崗泉

第27號

志乃

第27號

支部ニュース第300号記念

新ハイキングクラブ・横浜支部

歯 朶　NO. 27

目 次

		ページ
屋久島の思い出	太田繁信	1
雑文	横山勝利	2
回想の丹沢　N君のこと	祖父川精治	3
鳥海山の想い出	沢野正明	4
〝高見山〟回想	藤坂　弘	9
「山」アラカルト	石原弘之	11
雨飾山	飯島和子	14
平ヶ岳紀行	芹沢隆久	17
越後・荒沢岳	北村　襄	21
「たばこ病」について	柳川荘一郎	23
私と丹沢	御園培博	25
越後・荒沢岳	星野喜美子	27
三つの〝三国山〟	大島　保	30
会津磐梯山	田口　豊	31
キャンプ	石川信子	32
心に残る旅	熊谷松治	34
山以外の趣味	M.K	29
表紙題字	早川益雄	
会員名簿		37
編集後記		36

屋久島の思い出

太田繁信

屋久島は雨が多い。よく「一月に三十五日雨が降る」といわれるが、土地の人によると、これは毎日のように降るという意味ではなく、降れば土砂降りということである。事実、僕が行った時も晴天が続いた後、それを埋め合わせるかのように、四日目の夜に大雨が来た。10年も前のことだからお粗末なテントの我々は、安眠をたちまち破られてしまった。何しろあっという間に、周囲が池のようになったかと思うと、床上浸水になってしまったのだ。

そんなわけで、最後は雨にたたられたものの、それまでの山登りは、優雅なものだった。学生で暇のたっぷりある我々は、初日は海岸の安房で海水浴を楽しみ、二日目は、今はもう消えただろうトロッコ軌道を歩き、これも今は消えてしまった小杉谷荘に泊り、三日目に普通は日帰りで往復するのを、宮之浦岳直下の水場で幕営という、のんびりした日程を立てた。

二日目、長い長い軌道を歩きおえ小杉谷荘に入ったところ、主人に「そんな無駄な山登りはもう誰もせんよ」、と馬鹿にされたほどである。事実、普通の登り方（初日、小杉谷荘　二日目‥‥宮之浦岳を往復して下山）をすれば、雨には逢わなかった計算になるのだが、その代り、次に紹介する光景は、見れなかったはずだ。

三日目、縄文杉やウイルソン株などの古木をみたあと、稜線漫歩となり水場へ着いた。優雅な日程だったから、永田岳の往復、午後のデザート、昼寝とたっぷり時間はあった。少し早目の夕食を終えた後は、すっかり暇をもて余してしまったが、そんな時誰かが提案した。「少し登れば、海に落ちる夕陽を見られる。山でそんなことができるのはここしかない。」ここしかないかどうかはともかく、滅多にないことは確実だ。もうかな

り陽も傾いていたから、早速テントを飛び出し、斜面を登った。10分位登り、もういいだろうと振返ると、予想もしなかった素張らしい光景が広がっていた。

隣りの種子島の細長く伸びた姿が、くっきりと見え、遠くに開聞岳の円錐形、噴煙をたなびかせている桜島、うっすらと霧島の峰々が目に入る。そしてそれを取り巻く海、今から考えれば、雨の前兆だった雲の湧き立つ空。それらが夕陽が落ちていく時間の経過につれ、微妙に、赤や紫、青の色相いを変えて行く。波のきらめきなどは、言葉ではとても表現できない。陽がすっかり落ち、星がまたたき始めた頃、満足しきった我々は、ようやく腰を上げた。

雑　文

横山勝利

山行回数もめっきり減って、雪山の感触も忘れかけている現状である。振り返る山はどれもすばらしい。肩に食い込む荷にぜいぜいと苦しみながら登った後で、肩に紫色のあざがなかなか消えず、昨日のように想い起しては次の山行へと……。

最近は腰が重く、温泉付き山行とか、岩魚釣りだ、山菜だ。だんだん症状が重くなったと見えて、ヒグマだ、鹿だ、あげくの果てに棒で餌をかき廻す。今年は豪雪の影響で動物達には厳しい生活で、大くの仲間が死んでいった。ただ山を徘徊していた頃には動物の事など何も知らなかった。今年は機会を得て、日光の鹿の餓死した様を何体も見た。与える餌の量や種類、竹の葉、フスマ、圧し麦、乾し草、岩塩、どれも知らないことばかり、毎朝、早くから日没まで懸命に救出活動をしている人もある事を。万作の花が咲いたのを見て春を感じ、鹿が山へ戻るのを見て春が来たなと。

五月の連休、八方尾根の途中で強風の為に引き返す。何回目かの雨飾山、頭の中では、雪の多いのは分っていたつもりだが、想像をはるかに越える雪で、雪庇もおち

ておらず、一月は遅れている気がした。雪山には動物の足跡が残される。狸、テン、今回ははっきりとわかった。登る時やっぱり苦しいのかな、ここで小休止、想像しながら登るのも楽しいが、テンの爪の食い込みや、牙のするどいのを考えると、嫌な気もしないでもない。

偉そうなことを言っても凡人、は凡人、岩魚を釣ってダニに食われ、汗をかきかき蚊にもさされ、水、水と口ばしり、寒くなれば「ちゃっぷいちゃっぷい」とカイロをしこたま買い込む　何んだこれは‥‥悪夢であって欲しいと願いたい近況である。

回想の丹沢

N君のこと

祖父川精治

昭和20年代の前半、まだ戦後の暗い混乱期で、将来にあまり希望などもてるような時代ではなく、唯ひたすら山へ若い情熱をぶっつけていた。

この頃は、山の会は数える位しかなく、誰がどこの沢や谷へ入ったなどとよく話題となったものである。同じ会の仲間として、とくに親しくしていたN君がいた。今、想い返してみると、身震いするような無茶な山行を続けていた。南アルプス甲斐駒を両夜行日帰りで飛ばしたり、渋沢駅を夜半に出発。西丹沢では険悪無双といわれたサザン洞から同角沢の下降をノーザイルでやり、また夜道を渋沢へと雨山峠を越えて20時間、元気一杯歩いた。途中の大棚で傷ついたカモシカに襲われ、命からがら手近かな岩場へ逃げ登ったときの早さといったらなかった。

当時の丹沢、谷川スタイルを述べてみると、なつかしい登山風俗が浮んでくる。中古のソフト帽子を改造し、補助ザイルを巻いてリボンとし、山で拾った山鳥の長い羽根をそこへ差す。家から地下足袋姿で、沢へ入ると専ら素ワラジ。ボロの破けたチョッキの肩へザイルの束を引掛けると、どうみても井戸堀の人足といったところ。

尻敷きにはカモシカのものが最高級とされ、私も南アで雪崩で死んだというカモシカの尻敷きを得意になって使い、里道で犬に吠えられ追い廻され実に困ったことがある。

青春のほとんどを山へそそぎ込んだといってもいい、N君とは旅行作家、現代旅行研究所社長、野口冬人君のことで、今でも年に数回は山へご一緒している。

鳥海山の想い出

沢野正明

8月の末といえば、鳥海山あたりはもう夏山シーズンも終りに近い。日本海側特有の不安定な天候となり、山小屋も一部を除いては閉鎖となる時季でもある。こんな時、友人から鳥海山行に誘われた。

一度は是非行って見たい山ではあったが、天候が気になってあまり乗り気ではなかったが、思いきって同行することにした。結果的には、日本海特有の降ったり、晴れたりの天気ではあったが、下界へ下ってから大雨が降りだし、私は夜行で帰ったが、最上川の船下りをやると言っていた友人達も、あきらめて帰ったということで、この山行は、数少ないチャンスをものにしたともいえる。

友人達は、仕事の都合で、上野を昼近くに出る特急に乗るようだったが、私は日本海側の景観を車窓から眺めたいこともあって、早朝の特急で1人先行した。

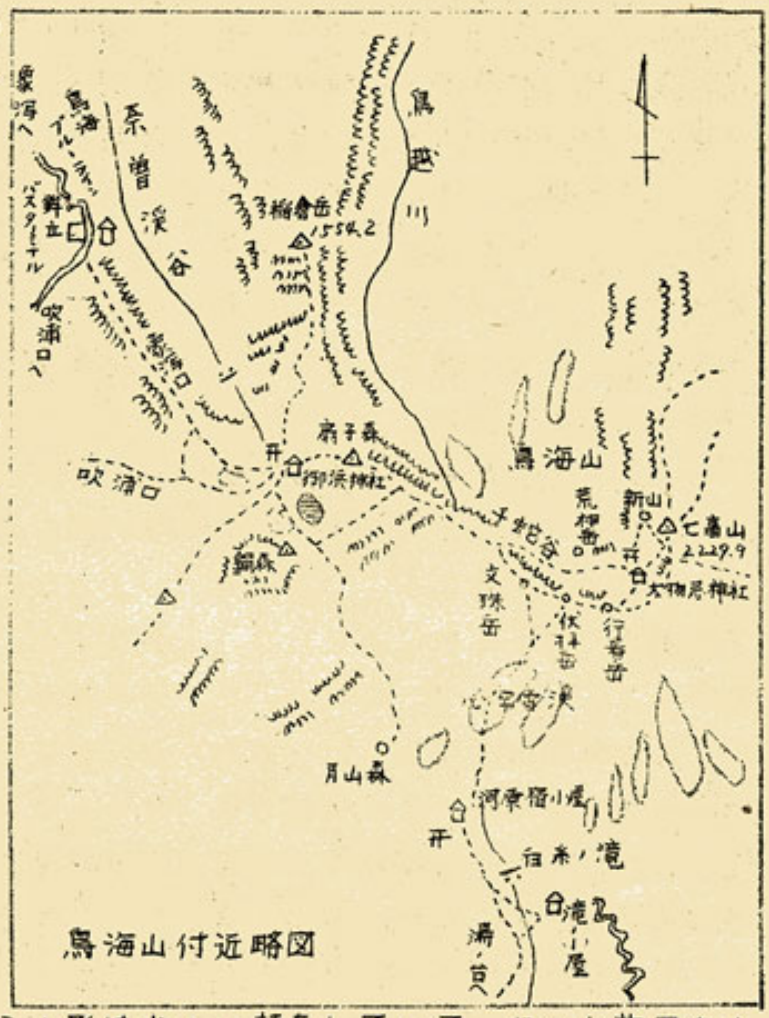
羽越線に入り、村上を過ぎるあたりから列車は海岸線近くを走る。小さな駅が点在するあたり、笹川流れ、鼠ヶ関付近は案の定、素晴らしい景観だった。北海道の積丹半島を思わせる。

酒田から鉾田まではバスに乗る。フエーン現象による大火で焼けたとは思えない程復興した、酒田の街を過ぎる頃、乗客は私と中年夫婦の、たった3人きりになった。吹浦を過ぎて、すぐ鳥海ブルーラ

インに入り、標高1100米位の鉾立まで運んでくれた。

バスを降りると、そこはもう秋の気配がただよっていた。風は冷いし、マイカーの観光客も寒そうにしている。

私は、当日御浜小屋まで行っていて、翌日友人達と合流する予定だったが、展望台でゆっくり奈曽渓谷の深いV字谷を見とれているうちに気が変って、友人達の泊る象潟町営の鉾立山荘にザックをおろした。16時頃、広い駐車場にくだると、もう人影は少なく、何となくうら淋しい景色である。皆さんも感ずると思うが、秋という季節は独独のもので、何となく言葉に言えないような淋しさを感じると思う。



又、山荘のおやじさんが変っていて、この上に御浜小屋があるから、そっちへ行けとつっけどんに言う。あとから来る仲間を待ち合わせるからと言っても、うさん臭い顔をしていて、やっと許可をもらったという感じがした。しかし話してみると、いいおやじさんで、御浜なら鳥海山に少しでも近くなるということで、勧めたものらしかった。

予定通り、外に車の音がして仲間が入ってきて、山小屋もにぎやかになった。めったに沸かさないという、風呂にも入れてもらって、おやじさんを交えて、酒を飲みながらの食事となった。泊り客は、

我々４人だけだったが、外にテントを張っていた若者が、外は寒くて寝られないといって、小屋に入ってきて一緒になった。何んと寒いんだろう、友人達はシュラフを持ってきていて平気だったが、私など毛布を５枚も寒くて寝られず、睡眠不足で困った。

この山小屋の炊事場は清潔で広く、しかも非常に使いやすい。自炊には便利で、皆をおこし、朝食をすませて暗いうちに出発した。

このコースは、象潟口といわれ、歩きやすい道であった。展望台を過ぎるあたりから明るくなり、鳥海山も見え晴天だったのが、水場近くなってきた時は雨が降ってきた、しかし、大した雨でなく傘をさして歩く、賽の河原あたりになると、花が目立つようになる。今となっては思い出せないが、ヨツバシオガマ、ハクサンフウロ等が咲いていたと思う。

御浜近くなると稲倉岳が左にせまり、景観は素晴らしいものとなる。かすかな稲倉岳への踏跡を左にみて、すぐ石に囲まれた御浜小屋についた。又晴れてきて右手に鳥海湖が見える、鳥海湖の回りをぐるりりと廻りたいものだが、みるみるうちにガスが出てきて、湖は見えなくなったので、あきらめて出発する。濃いガスの中、尾根どうしに間違えて入ったが、すぐ気がついて戻ると、御田ヶ原分岐の指導標が見えた。御浜からくると、そこで直角に左折するようになっていた。我々は濃いガスの中、多い踏み跡のうち指導標が見えないような位置を歩いていたようである。

一旦下って、又登り返す道となり、七五三掛に着く、この頃は又すっかり晴れて、左手に独特な稲倉岳の風貌が印象的だった。

そこで休んでいると、朝、鉾立にマイクロバスで来て先に登って行った白装束の一団がおりてくる。身軽ないでたち、ザック一つ背負わず、水筒を肩からぶらさげ、弁当も持っていないようだ。このような信仰的な登り方もあるもので、その健脚に感心しているうち、又、ガスが出て見えなくなる。

さて、七五三掛からは千蛇谷雪渓を行く道と、外輪山を行く道に別れる。ガスの中ではと千蛇谷コースをとることになった。湯の台口にある心字雪渓も有名だが、こ

の雪渓も素晴らしい。雪渓を斜めに横切るといった形で登山道に入るが、ガスの中、雪渓はぐんと上に突き上げているのが見える。

ガスの中黙々と登る、素晴らしい花々が展望のきかないのを慰めてくれるようだった。アオノツガザクラをはじめ、鳥海アザミの濃紫色があざやかである。12時、大物忌神社についた。神社に参拝し、素泊りのお金を払って小屋に入ったとたん、もの凄い大雨が降ってきた。よく今まで降らずにもっていてくれたものである。神社や小屋は雨水を利用するようになっていて、小屋の廻りには、ビニール製の水路ができている。

雨の音を聞きながら、所在なく昼食をすませて寝ころんでいたが、雨がピタリと止んだ。外へ出ると、雲が切れかかっている。今まで見えなかった新山が、岩石をるいるいとつき上げている。14時、カメラだけを持って身軽になり頂上に向った。近年にできた新山は岩だらけで積み重ねたようになっている。ペンキ印をたよりに2237米の頂上に立った。北西に日本海が見える。雲一つない、いい天気になったではないか、日本海特有の天候か、女心と秋の空か、頂上でけんけんがくがく、結局、女心と秋の空総員一致したようである。

新山から方向を北にとり、一旦谷をくだり、雪渓を渡って七高山へ向う。この雪渓は貴重な水場でもある。七高山への登り口が解らなく、皆で探しあて急登する。そこには又、花、花、花、イワギキョウが素晴らしい。七高山に立つと、北面の斜面に遠く矢島口の道が見える。七高山からは外輪山を廻る道をとって戻ることになるが、そこもお花畑の中の道であった。その中で、ベンケイ草が紅葉していて、その美しさに感心したりしながら、内壁を下って小屋に戻った。こんな遅い時季に花が咲いているなんて、思ってもみなかったし、思いがけなくきれいな花に対面できてうれしかった。

チョウカイフスマ

寒い小屋の中で毛布をふんだんにかけ、うとうとしているうちに、2晩目は終った。起きて暗いうちに外へ出た、明るくなってくると

何んと、日本海に鳥海山の影がうつっているではないか、急いで皆を起こし、カメラを持ってシャッターをきった。神社の人も来ていて、これは影鳥海といって、あなた方は運がいいといわれた。今までは天候が悪くて見られなかったそうで、千歳一遇のチャンスだったのである。

今日は天気が良い、朝食をすませ出発。外輪山に登り、お花畠の道を歩く。だんだん北面に雲が広がってきているが、南西には雲はない、新山を振り返りながら伏拝岳から、道標に従い剣坂を急降下すると、いよいよ心字雪渓に入る。上側の小雪渓を下り、大雪渓に入るが、チングルマやらいろいろな高山植物のお花畑で身を休める。

大雪渓を快適に下る、スキーのできそうな広さだ。ガスの時などは、道を右側に雪渓に沿ってとらないと迷い易いということだが、天気はよく、河原宿小屋に着いた。そこから滝の小屋に着いたが、小屋番が留守で、小屋の前でコーヒータイムにする。小屋を出発する頃、小屋番が林道の方から来るのが見えた。

下るにつれて林相も高くなり、ブナの林の中を歩くようになる。間もなく横堂についたが、神社か仏閣かわからないような建物で、信仰としての宿場として栄えたものを残すだけであった。

なおも下って、広い道に飛び出すと湯の台鉱泉は近い、バスを待つ間、国民宿舎の前で昼食を作っていると、急に雨がやってきた。急いで宿舎の軒下を借りて食事をすませたが、親切な宿舎の人が、バスを待つ間、ロビーに入れてくれ、休ませてくれた。この雨が後日まで続いた大雨だった。

運のいいことずくめで、行動中は、たいした雨にやられず、花はきれいだったし、何回も行けない山だけに忘れられない。

高見山回想

藤坂　弘

大相撲の高見山関が引退した。

幕内優勝を経験したことのある高見山関だが、この所は、かってのパワーが、すっかり衰えてしまった。

場所毎に負け越し続き、それにつれて、番付も下がる一方で、あっという間に、十両に落ちたと思ったら、その十両の位置にも留まれないことになっての引退である。

濃い揉上げ、特徴あるしやがれ声、巨体からは想像できない愛嬌ある仕種、カワユーイといわれるあの笑顔。もう土俵上では、見ることができなくなった。

淋しい。

三重県と奈良県の境に、高見山という山がある。

大台ケ原から北に伸びる台高山脈を70キロ余り、山脈の北端に位置し、標高1249メートル。

三重と奈良の県境をなす台高山脈の縦走は、熟達者向きだが、高見山だけであれば、関西からだと、日帰りハイキングとして、手頃な山である。

私がこの山に登ったのは、もう20年近くも前のことになる。

その頃、角界にはすでに高見山の名があり、初の外人力士、恵まれた身体からくり出すパワー等、話題性が多く、人気を高めつつあった。

そんな人気力士の股名と同じ名の山に登ることに、いつもの山行とはちょっと違った、いたずらっぽい気持で山へ向った。

ふた昔という時の流れを経た今では、途中の径についてのことは、私の記憶装置から消えてしまっているが、ひょっこりと、とび出した頂上の霧氷のすばらしさだけは、今でも鮮明に覚えている。

陽の光を受けて輝やく霧氷は、まるで花が咲いているように見えた。

花が咲いているように見えたのは、山名から、これから伸びよう

とする若い力士を連想し、やがて花開く姿を想っていたのかも知れない。

思いがけない光景だった。呆然として長い間見入っていた。

規模だけとるなら、より高い山、より寒さの厳しい山には、もっと大きな霧氷があるし、今迄にずいぶん多くの霧氷を見てきた。しかし、心に残った霧氷ということになると、この時のものが一番である。

「一番好きな山は？」と聞かれると、別の山の名をあげるが、「今迄登った山で、一番印象的だったのは?」と聞かれると、その度に「高見山の霧氷」と答えてきた。

最近の地図を見ると、頂上のすぐ南、高見峠を国道が越えている。高見山の環境も、当時とはだいぶ変っているかも知れない。

高見山関も、力士にピリオドを打って、これからは親方となって、後進の指導にあたるという。ぜひ、若い力士の素質を見い出し、伸ばし、花を開かせるよう、勉めてもらいたい。

登山用語

◇水場＝ハイキングコースや登山道の途中で飲料水の得られる沢、泉、または小屋など。

◇踏跡＝道とはいえないほどの細い道、また人の通ったあと、湿原の中で迷った時など頼りになる。岩場でもよく見れば岩角がすり減っていたり、何となくよごれているのでわかる。

◇けもの道＝一見踏跡に似ているが、これはけものたちの通る道。なんとなく動物の匂いがしたり、やぶの小枝に茶色の毛がひっかかっていたりする。人の踏跡は普通尾根やピークに向うが、けもの道はどこまでも横に山腹を巻いて行くのが特徴。

◇切り開き＝ササ原やヤブが刈り払って開けてある所。道になっている時もあるし、単なる山火事よけの防火線でもある。

巻き道　縦走路上で一つ一つの頂上を通らず平らに山腹を巻いて、ピークの向こう側に出る道。沢を登っている時、直接登れない滝をよけて通るルート（高巻きという）。

（山と渓谷社「土曜日曜ハイキング」より）

アラカルト

石原弘之

ある山行から

最近山へ行くと、中高年、女性の登山者が目立つようになった。新鮮な空気を吸って、マイペースで登る姿は楽しそうである。

あれは、もう10年程前になるだろうか、今まで山など、一度も登ったことのない会社のOLが、「丹沢に登ってみたい」といっている話を耳にした。そこで、おせっかいな山仲間達が、「連れていってやろうか」 ということになり、塔ヶ岳を中心とした計画がたてられた。ところが、誰いうとなく、「俺も、私も」ということになり、20数名の参加者となった。大半は、今まで山になど縁のない連中である。ところが、山腹を黄色に染める、ヤマブキの花のとりこになり、尾根から見える富士山に大声をあげ、これがきっかけで、山の常連となって、そちこちの山行を楽しむまでになった。

類は友を呼び、昨年はこの中からほほえましいカップルが誕生、彼等は新婚旅行にスイスを選び、お土産にエーデルワイスの押花を買ってきてくれた。私の山の手帳に、白い可憐な姿を納めている。

山歩きの目的に、眼下にひろがる展望に心はずむ尾根歩き。快適な沢歩き。四季の変化をみせる雄大な山容に接したい等、いろいろあるが、高山植物もその一つであろう。高山植物の定義は知らないが、言葉そのものに不思議な魅力がある。

丹沢山行から三年程して、高山植物の宝庫といわれる雲の平山行を実行した。もちろん丹沢を一緒に歩いた連中だ。ハイ松の間を歩いて行くと、目の前に、厳しい風雪に耐え、生きぬいてきた白いチングルマ、黄色のウサギギク、コバイケイソウ、ワタスゲ等の群落、或は岩かげに、雪どけの水の中に咲いている名も知らぬ花。手折るにはあまりにも可憐であり、高嶺の花という言葉そのものであった。

この雲の平山行の折にみた、薬師岳の雄大な山容が忘れ難いものになっていた時、NHKテレビ特集で薬師岳がとりあげられた。そこは、山のとりこになっている連中のこと、きせずして行こうということになり、五色が原から薬師岳の縦走を実現した。

こうして、なにげない一人のOLの言葉が、つぎからつぎへと夢をふくらませ、山を歩かせたのである。とすると、この一言は千金の重みがあったといってもよいのではなかろうか。だが、自分達で計画をたて、準備し実行するのは大変なことである。

最近、有名な山岳家であり文学者であった深田久弥氏の著書「日本百名山」を参考に、登頂する人が多いということを知った。一つのてだてとして、無難なことかもしれない。さて私だが、支部の皆さんが計画して下さる山行に参加して、山登りを楽しんでいる。すみません。

私と登山帽

山登りのスタイルは、昔から殆ど変らない。何年か前の服装でも、少しぐらいよごれていても、いたんでいても平気である。私などそれが山登りの勲章だ位に思っている。これが、スキーとなると大変だ。若者、女性が多いから、毎年新らしいファッションが発表され、宣伝され、売り出される。ところで、両方に共通してスタイルをきめるものに帽子がある。

スキーの方は雪の上で目立つように色彩の派手なものが多い。そこへゆくと、山登りは一般的に登山帽が多い。中には、鳥の羽根をあしらった高級なものもあるが、私も娘からプレゼントされたエンジ色のチロリアンハットを愛用していた。それが駄目になり、庇(ひさし)のついた野球帽に似たものから、休むとき敷物の代りにもなり、汗をふく事もできるパイル地のものまで、数多く愛用してきたが、これといって気に入ったもの、似合うものが少ないのは残念だ。

最近、山行を共にした一人の女性から、お土産といってパンダーラをもらった。若い人ならいざ知らず、私には似合いそうもないが、このさい、思いきって頭に巻いて、山登りを楽しんでみたいと思っている。

私と横浜支部

山へ登る楽しみに、よい仲間との交歓がある。私が新ハイの横浜支部に入るきっかけをつくって下さったのが、藤坂さんとの出合いである。

数年前、本部十二岳山行に参加した時であった。藤坂さんも参加しておられ、「横浜支部です」といわれた。それまで、横浜在住の方達と何回か山行を共にしたが、支部の話のでる事はなかった。この時の藤坂さんのすすめで、支部に入ったのである。

あれからもう二年近くなる。支部に入ってはじめての山行は、57年12月12日の十二岳山行であった。本部の十二岳山行は、雨のため途中で中止となったが、この日は天候にも恵まれて、楽しい山行となった。そして、初めての参加者が報告を書くことになっているということから、拙文を書いた。

それ以来、随分山にご一緒させて頂いている。北村代表を始め、皆さんとも、すっかり顔なじみになり、その人柄、家族的雰囲気にひかれ、例会にも出席し、楽しんでいる。

それ以後、本部山行にはご無沙汰し、もっぱら支部のお世話になっている。

皆さん、ますます元気でこれからも、数多くの山を踏破できる、支部山行の盛んになることを祈念している。　（石原）

登山用語

◇逃げ道＝エスケープルート。縦走路をたどっているうちに、天候が急に悪くなったり、けが人や病人が出た時、早く人里へ下れるような道。計画の段階でこのようなルートを調べておくこと。

◇ガレ＝くずれた岩や小石が積っている急斜面。へたに歩こうとすると崩れて仕末が悪い。踏跡に注意して安定した部分を歩く。動く石に乗って足をくじいたり、落石を起さないよう特に気をつける。特に大きな石の沢山ある所をゴーロ、砂まじりの細かい石からなっている所をザレなどと云う。

▷　◇　◁

雨飾山

昭和五九年五月四日歩く

飯島和子

最初の計画通り〝唐松、五竜、遠見尾根〟を登っていたなら、さっと〝雨飾山〟という山を知らないだろうし、登れる機会もなかったと思う。

八方尾根第三ケルンを登行中、風速35米の強風にあおられ、足が一歩も出ず後退し、目的地を雨飾山へと変更した。結果的には替えて良かった。何倍も楽しい、実のある山行が出来たのだから……。

5月3日、白馬駅前よりタクシー、バスと乗り継いで、午後4時頃、山麓のいで湯、小谷温泉に到着した。上信越国立公園の西端にある小谷温泉は、新潟県側の梶山新湯と共に、雨飾山への登山者にとって、恰好の温泉場である。二軒ある旅館のうち、私達は太田旅館にワラジを脱いだ。

明朝登る未知の山について、何一つ知らない、知らないから、不安も期待もわいてこない。

午前4時40分起床、5時20分には宿を出た。林道一時間は歩くというリーダーの声に、早朝歩くのが苦手な私は、まだ目が覚めきっていない。いつも思うのだけれども、早朝歩きの山登りほどつらいものはない。まして、重いリュックをしょって歩くなんて、何かいい方法はないものかと、いつも考えてしまう。

空を見上げると、所々青空が見える、雨の心配は全くない。あたり一面雪景色で、振り返ると、昨日引返した白馬、五竜、鹿島槍までよく見える。

さあ、頑張って歩かなければ、おいていかれる。雪道をよく見ると、私達より先をアイゼンをつけた数人が歩いているらしい。この地へ5回も足を運んだ〝もの好き〟リーダーでも驚く程、例年にない雪の多さに、様子が一変し戸惑っている。

1時間半位歩いた所で朝食にする。このあたり広河原といって、上高地を縮少した風景だ。食事中、

単独行の男性が通り過ぎた。本日始めて出逢ったヒトだ。トレースは続く、雪の量は多いのに、もぐらないから歩きやすい。大海川が右に左に流れを変え、その度にスノーブリッジを渡る。帰りにも渡るのだけど、このまま残っているのか心配だ。（もしもたくさん時間があったら、スノーブリッジのくずれる所を見届けたいのだけど）

途中でアイゼントレスと分れ、私達は、ブナ林の中を急登し、山腹を巻いて行くと、荒菅沢を見下ろせる横断地点に出た。きれいな雪の斜面は動物の踏跡以外何もなく、この大自然の中は、人間の踏跡は似つかわしくない所のようだ。この雪の斜面の美しさに、しばし見とれる。

ここで始めて、リーダーにザイルでしばられた。こんな急斜面はどうやっておりたらいいのか、考えながらおりるのだけど、身体と頭の中と、別行動なのか、すぐ尻もちをついてしまう。それがとても楽しい。やっと荒菅沢におりたった。見あげると沢の源頭南面に大岩壁、フトンビシと呼ばれる岩場がそそり立っている。まるで、マチガ沢から谷川岳を眺めているようだ。

夏ならばこの沢も水であふれ、飛石づたいに対岸に渡るのだろうが、雪の季節は簡単に、対岸の尾根に取付ける。頂上の双耳峰が見えかくれする。急登、又急登、リーダーの上手なピッケルさばきをたしかめながら、マネするのだが、うまくいかない。リーダーは、スイスイ先を行く。天気も申し分なく、気分はルンルといきたいところだが、このコース一番の難所にたどりついた。稜線直下は、7・8㎞もある大きな雪庇、その直下を通過する。クレバスは深く口をあけていて、すいこまれそう、気温も上昇しているので、大分解け、くずれるのは時間のもんだいとか

息をこらして静かに通過、大きな声を出したらくずれてきそう、心臓がドキドキする。最大の難所を無事通過したとたん、ドッとつかれが出て来た。頂上はすぐ目の前に迫っている。でもあきらめた。リーダーには申訳ない事をした。せっかくあと一歩で頂上と云う所で弱音をはいてしまって……。

私達は、見晴しのいい安全な所で、ゆっくりコーヒータイムをとった。目の前一パイに広がる、妙高から火打の稜線がすばらしい。1時間余りもあきずにながめていた。頂上を踏む事より、もっと貴重な時間、有意義な時間がもてたようだった。

この山の魅力は、静かで変化に富んだ山歩きが出来、雪の斜面の美しいことだ。本日出逢った登山者は、私達も含めて9名、その内女性2名、山頂を踏んだ人6名だった。最初は、そろりそろりと下手な歩き方だった私も、もう山も終りになる頃、やっと歩き方、かけおり方が上手になってきた。山靴を通して全身に伝わるこの感触がたまらない。それぞれの山に、それぞれの魅力があるが、人のいない静かな山、雨飾山で体験した数々の想い出は、私を有頂天にした。心をあとに残して、又きっと来るからねと、山に別れを告げた。

「登山用語」

- 涸れ沢・涸れ川＝水が伏流になってしまった沢や川。普通ゴーロの形になっている。大雨のあとや、夕立などで水が出ることもあるから、道がこの中に続いている時は注意。
- ケルン＝何かを記念するために積まれるが、道しるべが本来の役目。ゴーロやガレを斜めに横切る時など頼りになる。人を迷わすような場所に積んだり、積んであるものを崩したりのいたずらは、しないように。

平ヶ岳紀行

芹沢隆久

清四郎小屋の前に、既に葉の落ちた大きな樹があり、実が幾つも落ちていた。栃の実かなと思って奥さんに尋ねると、梨の実だという。成程よくみると、それは小粒のまぎれもない山梨の実だった。昔は採って食べたものだが、今は子供も見向きもしないという。

10月10日体育の日、私は午前4時半に清四郎小屋を出発した。闇夜の中だった。昨日から断続的に降っていた雨は止んでいた。登山口へと舗装された国道を歩きだした。全てがまだ寝しずまっている。昨日の朝、上野を発ち、バス、船を乗りついで、小屋に着いたのは、午後四時を既に回っていた。小雨の中を、コースの下見に行ったのがここで役に立った。私のポケットライトの小さな光では、登山口を捜すのに苦労をしたことだろう。

電池を入れ替えたばかりのそのライトは、登山口から林道を登りだすと、もう光が弱まり今にも消えそうになってしまった。もっとしっかりした懐中電灯を持つべきだと深く反省した。しかしまだ下見をした道なので、ライトを消して登り続けた。まだ暗い、5時前だ。日の出が5時45分頃なので、もう少しの辛抱だと思った。沢のすぐ手前の空の開けたところで、岩に腰かけ、ニギリメシを口にほうりこんだ。

食欲がある訳ではない。もう少し明るくなるのを待つつもりで食事にしたのだ。すると谷の方から、白い煙のようなものがあがってきた。それはみるみるうちに成長して、頭上の空までおおってくる。霧が発生したのだった。――ああ、今日も天気は駄目か、せめてあと1時間、雨よ待ってくれ――、そんな心境であった。

沢を飛び石伝いに渡り、一張りのテントを見送って更に進んだ。ガイドブックには、林道は二つに分かれるが、そのまま直進すると、

すぐに平ヶ岳への道標があるが小さいので、見落さぬようにとあっだが、新たに立派な標識が設置されていて、見過すことはなかった。唯、その径は熊笹におおわれていて、昨日の雨をたっぷり含んでいるようだった。私はそこで、雨具のズボンをはくことにした。

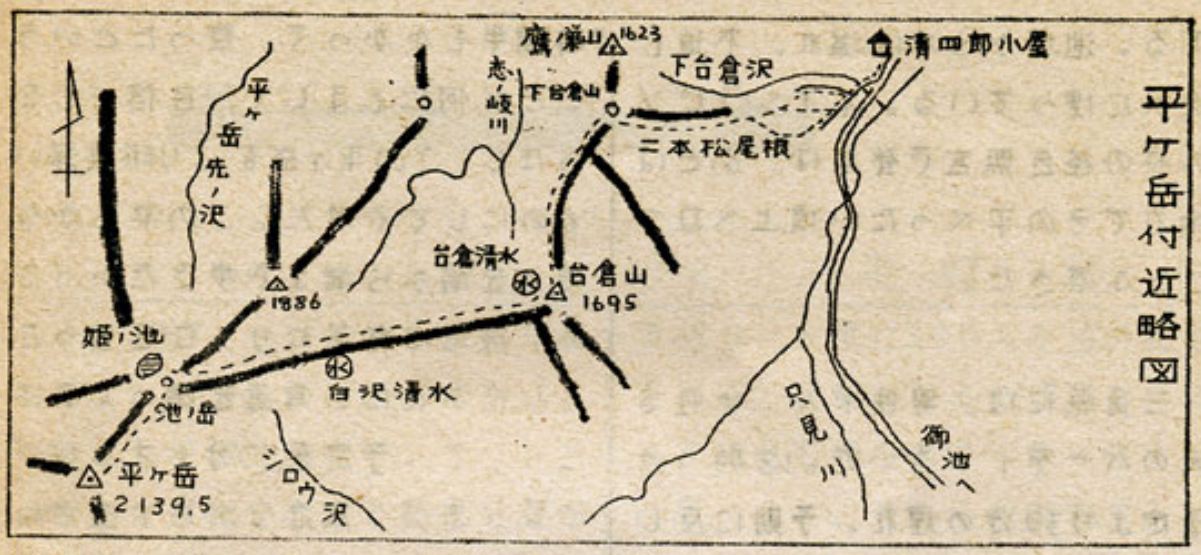
ここから下台倉山までの前坂と呼ばれる登りが最もきついところ‥‥、人の気配はしない。燧ヶ岳が白い霧の中から頂上の双耳峰だけを現わした。今日はこれで見納めかもと、夢中でシャッターを切った。そして登っているうちに姿を隠してしまった。行く手の高い所も霧の中だ。自分もその中に入ってしまうのかと、半ばがっかりしながら、尾根筋の急登を一歩一歩進んだ。それでも周囲の明るさと共に、更に深みを増していく樹樹の紅葉に慰められた。下台倉山に着いたのが7時25分。こつめのミカンを食べて、休んでいると、行く手の径から、子リスがこちらに走ってくる。私に気付かないで突進してくる。私も岩のようにじっとしていたが、気付いたのか、こちらの様子をしばらくうかがっていたが、今来た径を一目散に駆けていった。

そこから台倉山へは、小さなアップダウンを繰り返していく径であった。台倉山の頂きには、三角点（のようなもの）があった。径がぬかるんでいるので、そこに腰を下した。5分ぐらい休んでいると、一人の青年が登ってきて、あとどのくらいですかと聞いた。あと2時間半、もう10分で第一水場がありますと答えた。彼は立ち止りもせず、そのままどんどん行ってしまった。

相変らず、燧の方は霧の中だが、行く手の平ヶ岳のほうは、去来する霧の中に大きな稜線のなだらかな山が見え出していた。

10分程下ると、テントが二張りあった。シャツが干してあったが、誰もいないようだった。水場はコースを右に急に下った所にあった。流れは思ったより細かったが、ノドを潤し、ポリタンを満たすに充分であった。

台倉山で10分、この水場でも15分休憩してしまったので、予定タイムよりかなり遅れてしまった。水場から縦走路に戻ると、樹間ごしに陽が差してきた。丁度9時。どうせ東の間の晴れ間だろうと、



期待もしなかったが、やがて青い部分が確実に大きくなっていった。しかし、道は完全なドロンコ道で、雨具のズボンは既に泥だらけ、水たまりをよけて、石に左に跳びながら歩いた。私の知っている中でも最高に近い悪路であった。（あとで宿の人に聞くと4日間も雨が、ずっと降っていたということだった。）

下りになって30分程行くと、大きな倒木があった。陽が当り休むに丁度よかった。池の岳が青空の下に、はっきりと見えた。そこに腰をかけ、残りのオニギリを食べた。天候の回復と共に、食欲もでてきた。10分休んだが、3人の人に会った、皆、帰りの人達だった。泥だらけである。第二の水場、鷹ノ巣水場に着く。ワンゲルの学生達が、帰りの仕度をしていた。水量は、思ったよりなかった。ここではあまり休まず、池ノ岳をめざした。下山者にかなり会った。皆途中でキャンプし、早朝平ヶ岳に登った人達だ。すれ違った女性パーティに様子をきくと、径はしばらくドロンコ道だが、頂上の眺めは素晴らしかったという。

私もそれに元気づけられて、前進した。池の岳への最後の急な登りを、かみしめるようにゆっくり登った。左側に平ヶ岳がはっきりと見えた。谷筋の紅葉が鮮かだ。やっと登った池の岳も、姫の池へ出るまでは、小潅木の中の水たまりの径であった。姫の池の周囲には、木道が敷いてあった。秋の陽がさんさんと当っても、風は冷たい。そうそうに平ヶ岳へ向う。一旦鞍部に

下る。池塘から水は溢れ、不道も流れに埋っている。オオシラビソの林の径を無言で登れば、あとは余力でその平べったい頂上へ立つことができた。

三角点には、男性1人、女性3人のパーティーがいた。12時4分、予定より39分の遅れ。予期に反して、すっかり晴れ渡った空。四囲を見渡せば、紅葉に染まる荒沢岳、越後三山、もちろん燧ケ岳に至仏山、上州武尊山、それにかすかに富士山までも見えた。4人のパーティーに、富士山が見えますよと教えてあげると、エーッ、ホントと、信じられないように云いながら、立ち上がって、その方向を見ていた。

聞けば車で林道に入って、登り3時間で頂上まで来たという。私が休憩も含めて7時間半もかかったのとは大違いだった。彼らは地元の人たちだから、ガイドブックにもない近道を知っていたのだ。けれども私には7時間半もかかって、登ったということが何にもまして、自信にもなったし、この平ケ岳を、より印象深いものにしてくれた。この平らかな頂上を端から端まで歩きたかったが、彼らに紅茶やリンゴを貰ったりしたお礼に、写真を撮ってあげたりして、予定を50分もオーバーしてしまい、残念ながら下山に向った。

途中、上智大のワンゲル部の男3人、女1人のパーティーに会った。彼等は至仏山から山中一泊し、ヤブコギしながら平ケ岳に登ってきたのだった。彼らとは抜きつ抜かれつだったが、彼らは連日の疲れがでたのか、後半は遅れてしまった。

私も夕日に輝く燧ケ岳を見つつ、そして黒い影になったのを見届け、清四郎小屋に着いたのは18時5分。日は完全に暮れていた。奥さんが玄関に出てきて、ジュースを出して迎えてくれた。　—完—

観光たばこ「那須」1971より

越後荒沢岳

北村　襄

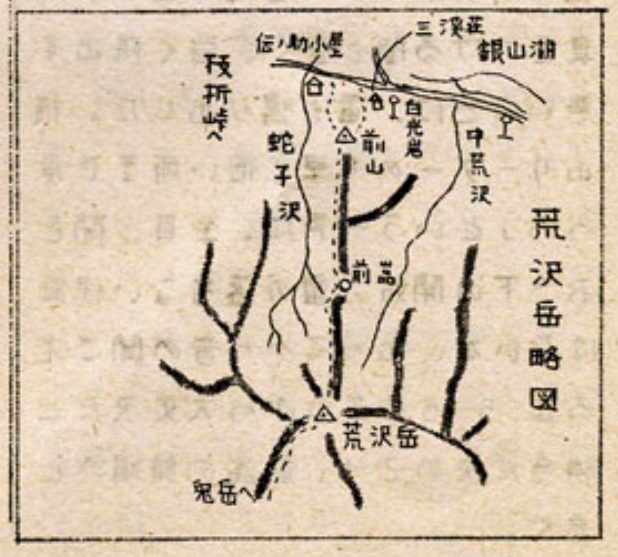
7月20日、一行8人を乗せた車は、エンジンの音も軽ろやかに、関越道を快調に飛ばす。

途中、運転を3人で交代しながら、深夜の三国トンネルを過ぎ、一路奥只見湖へ、小出の町を右折、シルバーラインへ入る直前、車窓より越後駒ヶ岳が、夜明けの淡い光の中に顔を出す。

一同、まんじりともせず、走る車の中で明かした眠い目をこすりながら、駒ヶ岳を眺める。ここから奥只見湖までは、短いもので50m、長いものは4kmに及ぶトンネルを17コ程、合計すれば20km近い、地底の暗闇の世界を通る。17番目のトンネルの中程が、丁字路になっている所を右折、駒ヶ岳より奥只見湖へそそぐ北の又川を渡れば、銀山平と呼ばれる、昔の銀鉱山の跡に到着する。

この銀山は、聞く所によると、寛永18年（1859年）、一人の坑夫のツルハシが、只見川の河底を突き破り、一度に300人からの死者を出し、閉鉱になった場所とのこと。それも現在では、奥只見ダムの底に沈み、それらの面影すらもない。

横道にそれたが、銀山平三渓荘の前に着いたのが早朝の5時頃。車より出ると肌寒いくらい、横浜とは大分違うようだ。天気は、ガスが低く立ち込め、今にも降り出しそう。簡単な朝食をすませ、行動開始。前山（1090m）までの急途に汗を流し、前山山頂についた頃、ガスも切れ、駒ヶ岳や、これから登る荒沢岳方面、下方には、水面を白いガスに包まれた、奥只見湖



が見える。感激の余りシャッターを切る。

ブナ林の中を、登ったり降ったり、いいかげん疲った頃、目の前に、前嵓（1536m）の岩峰が立ちはだかる。一度、岩場を右に見て50m位下り、巻道に入る。途中鎖がついているが歩きにくい。草付きの境に急な鎖場、一人づつ慎重に登る。途中岩陰に、鮮やかな橙色の車百合が数輪、我々にほほえみかける。

登り切ると主稜、しばらく登り降りをくり返し、背丈程のやぶを押し分け、ただひたすら荒沢岳へ向う。頭上には何百という赤トンボが飛び廻り、差し出した指先にとまる。ガスがくると、一匹のトンボもいなくなる。まもなく、大粒の雨がポツポツと降り出し、雨具をつける間もなく、強く降出す。悪いことに、雷も鳴り出した。横山リーダーの「早く低い所まで戻ろう」という一声に、全員、間をおき下山開始、雷の落ちない保証はないが、光ってから音の聞こえる迄、5～6秒あるから大丈夫だと勝手に決めこみ、前嵓の鎖場へと急ぐ。

運よく鎖場へつくころには薄日が差し、雨もカラリと上り、周囲の山々もはっきり見えた。すべりやすくなった鎖をたよりに、一部ザイル等を補助にし、全員無事通過後、又雨。まったく山の天気と何とやら!! 靴の中まで、ぐっしょりになり湖畔に辿りつく。

今回の山行予定では、最初、山小舎を使う事にしてあったが、全員の希望で、横山リーダーが栃尾又温泉の宝巌堂という所を予約しておいてくれたので、登山と温泉という、デラックスな山行となった。

6時着、ビショビショにぬれた我々一行を、いやな顔もせず、床の間付きの20畳位と、12畳位の部屋に通じてくれた。仲々感じの良い宿の人達だ。まずは一風呂ということで：今年の4月に出来た温泉センターへ、湯槽は、ぬるい湯、熱い湯、超音波風呂、圧力風呂等があり、一つづつ浸って来た。

部屋へ戻ると、これ又、豪勢な夕食が用意されていたのにビックリ。鮎の塩焼、鯉の煮付、ハマチ？の刺身、エビのフライ、山菜等等。朝から、食事らしい食事の出来な

かった一行、食べるは食べるは、お米のおいしかったこと天下一品。

朝、沢の音に眼をさます。空は快晴、昨日と入れ代れば良かったなどと、皆それぞれ、朝方の天気も三国トンネルをぬけると雨、たった一山で、こうも違うものか、ルート17、関越道と乗りつぎ無事横浜へ。荒沢岳の、男性的な荒々しさと、みんなの友情につつまれた、思い出に残る山行でした。

◇

「たばこ病」について

柳川荘一郎

たばこは、毒物の正づめといわれるほど有害なものです。一寸考えるだけでも、ニコチンという毒物の入っている草の葉を紙で巻き、火をつけて、その煙を吸いこむのですから、体によい訳がありませんね。

たばこの煙を吸うことによって発病したり、悪化したりする病気を、ひっくるめて「たばこ病」といいます。その主なものは、たばこ癌（のど、舌、口、肺、食道、胃、肝蔵のがん）、呼吸器たばこ病（慢性気管支炎、肺気腫など）循環器たばこ病（胃、十二指腸潰瘍など）、皮膚、美容たばこ病（肌あれ、こじわなど）、妊婦たばこ病（不妊、早産、流産など）で、殆んどすべての成人病が含まれます。しかも、これらの病気は、吸った本数と関係があるといわれています。従って、若いうちから沢山吸う人ほど、発病率は高くなります。

（「一日の本数×喫煙年数」が、400以上は、癌になる危険が高い。止めて5年たつと、危険性はずっと下る。）

さらにたばこは、吸う人自身だけでなく、その煙は、まわりの人にも害を与えます。列車内、航空機内、閉めきった部屋などでたばこを吸うと、室内の空気が汚染されて、同じ室内の吸わない人の健康を害します。有害な煙をまきちらして他人に迷惑をかけ、また火事の第一の原因である吸いがらで、街路や駅のホーム、線路の中まで汚す「たばこのみ」は、自ら「公害発生源」であることを自覚しなければなりません。

米国ミネソタ州、ニューヨーク州、イタリヤ等は公衆の集まる場所では、原則的に禁煙となったそうです。日本とは逆に、表示のない所は全部禁煙、レストランでも、航空機内も喫煙席の方がせまいのです。ソ連、フランス、スエーデンでも喫煙規制運動はおし進められています。WHOは、数年前から国連加盟国に対し、国民にたばこの害を説明し、禁煙の方向に指導するよう呼びかけていますが、日本では何故か、この運動ははかばかしくありません。3年後の昭和62年、第6回「喫煙と健康世界会議」が北九州市で開かれます。それまでに外国の人達に笑われないよう「たばこ公害対策」を進めたいものです。

いまや、たばこは未成年者だけを対象としてではなく、人類全体で考えなおすべき時期にきています。たばこの害は十分にわかっていても、ひとたびこの悪習にそまると、並大抵のことでは止められないのは、大多数の「たばこのみ」のよく知っているところです。若い人たちが、この悪習にそまらないよう防いだり（防煙）、吸い始めた人たちが一日も早くたばこから離れる（離煙）ことができるよう大人からお手本を示すべきでしょう。

「たばこのみ」はやめるよう努力する。止められなくても本数を減らしたり、他人のいる狭い部屋では吸わないようにするなど、喫煙規制の方向に努力の姿勢を示しましょう。（医師、当支部会員）

◇　◇　◇

（月山登拝の折、宿舎のマッチから）

私と丹沢

御園培博

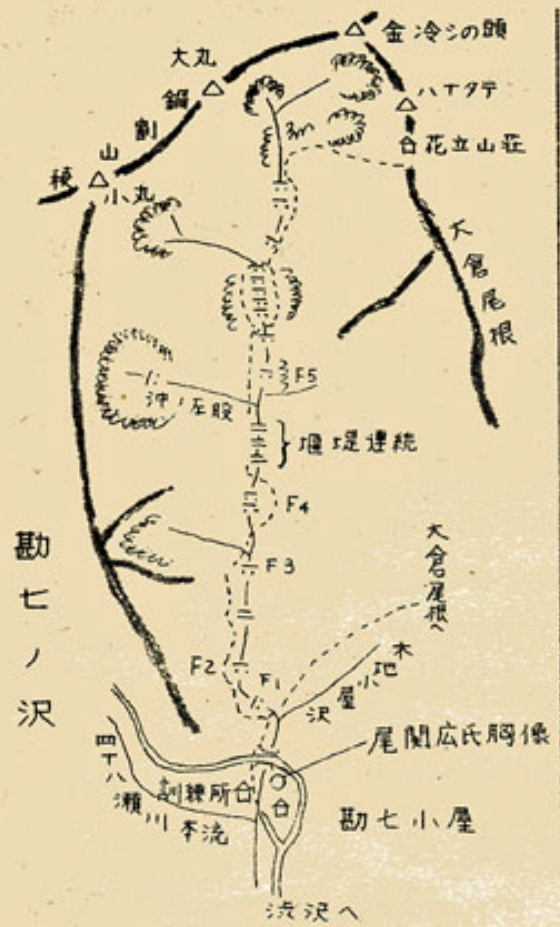
昭和26年4月1日、丹沢四十八瀬川勘七沢へ第一歩を記して以来、今日まで33年間、(ただし、我が家の子育て期間中の13年間は、山好きの女房に遠慮して中断。)したがって正味20年間、丹沢に取りつかれたというか、魅せられたというか、通いつづけてきた。

この丹沢を、私の意識の中に始めて印象づけたのは、昭和23年3月、学生生活の最後を記念して、箱根金時山に登った時だ。山頂で金時茶屋の妙子嬢(おさげ髪のホッペの真赤な少女だった)から、周囲の山々の説明を受けたが、白銀に輝く富士山もさることながら、特に強く印象に残ったのは、丹沢山塊の大きな山容であった。

それから2年、職場の先輩に連れられ山登りをすることになったが、第一回目がまた金時山で、山頂から再び丹沢を眺めたことによって、「丹沢に登る」という気持が決定的となった。

こうして始めての丹沢が、冒頭書いたとおり勘七の沢登りであった。無中でF_1からF_5と滝を登り、詰めのガレ場を過ぎ、ワラジ履の足に冷たい残雪を踏んで、憧れの塔ノ岳へ、山頂からブナの樹林(今は一本もない)を通して見た富士山や、丹沢へ入るきっかけとなった、金時山に感激したのは、今も忘れられない思い出である。

それからは、月に2～3回は沢の遡行、あるいは尾根歩きと登降を繰返した。当時、丹沢に入る者は独特なスタイルをしており、「丹沢党」と称されていた。そのスタイルを紹介すると、「はきもの」……家から山ろくまでは、女物の履き古した下駄。沢の出合いでワラジにはきかえ。「帽子」------中折帽を改造したチロリヤンハット。「チョッキ」―― 背広のチョッキで裏生地をボロボロに切裂いたもの。「ズボン」―― 手直しのニッカ。このスタイルで、夏は上半身裸のう



えにチヨッキを着て、南面の沢であれば、一日に2本や3本の沢を遡行して自慢の種としたものだ。こうしたスタイルも、20年後半には下駄に変って、ナーゲル（鋲靴）が登場し、一般的な山姿になっていった。

昭和30年、国民体育大会が神奈川県下で開催されることになり、登山部門は丹沢と決定した。そこで、西丹沢を含め山域全体にコースを設定する必要から、県山岳連盟傘下の山岳会が、登山道をを開発することとした。種々コースを下見しながら歩いたが、なかでも檜洞から大室山・加入道といった山域は、ほとんどが藪におおわれた状態だった。

当時の県岳連会長の尾関広氏（現在、四十八瀬川二俣に氏の生前の業績を記念して胸像がある）を先頭に、何回も入山し、藪を払い、道標を建てていった。

ところで現在の丹沢は、シーズン中であれば、一日に2～3万人が入山するが、昭和33年頃、年間の入山者が一万人を超えたということが新聞紙上でニュースとして取り上げられるほど登山者は少なかった。当然山小屋も国体以前は尊仏小屋（現在の山荘は国体開催のために建設したもの）のみで、それ以外は、テントをかついでの山行だった。また、現在のようにバスがなく、駅から歩いて入山した。

西丹方面も神縄まで一日数本の便しかなく、あとは歩くだけだった。したがって、檜洞方面は、渋沢→中山峠→寄→雨山峠→ユーシン→金山谷東越→檜洞丸といったコースで、途中幕営の2日がかりでやっと山頂という日程であった。

あまり長くなるので、この辺で止めるが、最後に今年の大雪は丹沢では記憶にないものであった。本年3月11日、その前日が54歳の誕生日であったことから、記念登山として塔の岳へ登ったが、尊仏山荘の山岸氏も始めての経験と言っていた。これから先、何年山が歩けるかわからないが、やはり丹沢へは、通い続けることとなるだろう。

越後
荒沢岳

—◇—

星野喜美子

（前岳上から荒沢岳）

7月20日夜10時、小雨降る西口を後に、私達8名を乗せた車は、一路銀山平に向う。早朝4時過ぎ無事到着、銀山湖の上には朝霧が深く立ち込めているが、目指す荒沢岳は、どっしりとその全貌を見せている。左右に長いピークが幾つか、どれが頂上か定かではない。

5時半登山開始、ノッケから樹林の中の急途、やがて右手に越後駒と中の岳が美しい姿を見せる。前山で小休止、四囲の山山を眺め晴天を喜び合う。

最初の鎖を前に、これが鎖場、大した事ないじゃ等、勝手なことを云って登り始めたが、これからが大変、苔の付いた一枚岩にヒヤ汗、ザイルの助けを借りる。此処の鎖は一ヶ所一本でなく、長い鎖が何ヶ所かの岩角に付けられた輪を通って曲りくねっている為、先の人が一ヶ所を登り、次の岩に取り付いても鎖が一本の為、次の人は待たなければならず、時間がかかる。

やっと最初の難関を突破、見晴しの良い小尾根に出る。前には前岳の絶壁が立ちはだかり、どうして登るのか心細い。道は絶壁の下へ急降下、鎖を頼りに水のしたたる岩と草の中を巻き、再び長い鎖

を伝って尾根に登り返す。ピークを幾つか越えてやっと前嵩、この頃からガスが出はじめる。頂上までまだ2時間、頑張らなくちゃ。

登ったり下ったり、石を巻き左を巻く、笹の中に木の根や枝が出て歩き憎い。やっと尾根を登り頂上かと思うと、又前に立ちはだかる。こんな事の繰返しで嫌になる頃、遠雷の音と、頂上だという声、そそり立つ岩の中腹の、カニの横バイの様な所を通り越した時、バラバラと雨が落ちて来た。まだ来ない人も居る。すぐ上に向って、戻ります、と声をかけ、急ぎ引き返す。すごい雷鳴と稲光り、尾根をはずして、小木の陰に身を寄せた北村さんの傘の下で雨具を付けたが、もうびっしより。

頂上を踏んだ人が戻り、安全な場所に移動して、雷雨の去るのを待つが止みそうにない。ピカッ、ゴロゴロ、ガシャン　横山さんが数をかぞえて、3粁位先だと云う。それから1人づつ間を離して、高い木の下に入らない事等、注意を受けて下山にかかる。雷鳴の響く度にドキッとする。

この雨の中、先程の鎖場ではどうなる事かと心配だったが、前嵩で晴れる。一同記念撮影、トンボが無数に飛び、保坂さんの頭や手に止る。一息入れて再び前嵩の鎖に取付く、上りより恐い、下の方から横山さんが、足元に気をつけて、ゆっくりでいいよと、声をかけて下さる。

先行の人を待つ間、辺りを眺める。空は雲が切れ、地には花が咲き乱れている。銀山湖から向うの山々が美しい、あれが未丈、その向うが毛猛と、会越の山に詳しい祖父川さんが教えて下さる。最后の鎖場を、あと3人で終ると云う時、再び雷雨となる。激しい雨の中、前山迄登ったり下ったり、前山からは、ひたすら下り続け、5時すぎ、やっと車に戻る。

横山さんが、伝之助小屋をキャンセルして、栃尾又温泉に宿を頼んであったので大助かり、浴衣に着替えて下駄を履き、階段を下りて共同浴場に行く。3軒の宿の共用で、4月に出来たばかりで気持良い。夕食は二の膳つきの豪華版、早速ビールで乾杯、お疲れ様でした。

翌朝、爽やかな夏空が広がる。

ノンビリ散歩を楽しみ、10時帰路に着く。車窓に越後駒、そして八海山が見えて来たが、昨日と同じ、瞬く間に雲が掛ってしまった。元橋では苗場山から下って来たのであろう登山者が、バス停に並んでいる。それを見て誰かさん、汚いネー　だから山ヤは嫌いだよ、だって。

三国峠は雨、沼田で昨日の分を取戻すかの様に、デラックスな中食、昼寝どころかますます目と口が冴えて、お腹の皮をよじりながら、5時半、西口チョゴリザ前到着。それぞれ買物をして、無事解散となりました。

今回は、種々貴重な体験をして、大変良い勉強になりました。係の横山さんには、お世話をかけました。又、車を出して下さった保坂さんを始め、皆さんのお陰で、楽しい山行が出来ました事を、主人と共々喜んでおります。

◇

山以外の趣味

M・K

山歩きをされる方には、多趣味の方が多いように思われる。山でスケッチをするとか、写真、或いは植物に詳しい人など様々だが、山と直接関係ない趣味をお持ちの方も多い。

自分の趣味のことを書くと恥をさらすことになるが、私も山あるきを始める前はやたらに物を集める趣味があった。横浜に出てくる前は、福島の古河炭鉱という所にいた。あぶくまの山にくわしい方ならご存じの赤井岳の東南、平の西にあたる所、ここで郵趣会に入り、郵便切手をせっせと集めていた。収集を通して得た友人で今でも交友の絶えない人が数人いる。又、切手以外にも、乗物の記念乗車券とか、記念たばこ、広告マッチ、箱袋、コイン、等々。

しかし、炭鉱が斜陽化し、横浜に移ってから入った郵趣会は、あまりに商売気の多い人がいるのにいや気がさし、退会してしまった。それに横浜に来て2年目に、建てたばかりの小さな家が、隣家から

（33頁下段につづく）

三つの三国山

大島　保

この一年間、腰痛に悩まされながら（今もまだつづいてはいるが）自分自身に無理のない山々を求めて登った山に、三国山という山がある。必要最少限の食料、水、雨具、地図、磁石等を持って、身近な三国山と呼ばれている山を、6月には、上野原駅より生藤山のとなりに、神奈川県の北端の山に、山頂が相模の国、武蔵の国、甲斐の国の境界となっている山をおとずれ、7月には、箱根の三国山、山頂が相模の国、伊豆の国、駿河の国の境界となっているが、山頂は深い樹林に覆われ、展望はない。

8月には、駿河小山駅より湯船山のとなりに、山頂が甲州の国、駿河の国、相模の国の境界となっている、三国山をおとずれたのではあるが、バスは明神峠行きであったが、ねの神堂 ― 明神峠間が工事中に付き、ねの神堂止りで、明神峠まで約40分歩くはめになる。

登山道は、おとずれる人がないためか、90％以上がヤブ化している。どの三国山もあまり登られていないらしく、静かなる山々が楽しまれる。

昔、この国境界が定まるまで、中近東の紛争ではないが、血なまぐさい斗の中で国境がきまっていったのであろう。どの三国山も血と汗の国境大紛争を秘めた山ではあるが、登って見たかぎりでは、そのような感じを見い出せない、静かな山ばかりである。

右足が甲州国、左足が駿河の国ひととびで相模の国に行く事が出来るのは、三国山ならではである。これらの山を訪れる人は少ないためか、登山道がヤブ化した山も有り、淋しい気がするも、歴史を秘めた山、三国山、もうすこし人々から登られていい山ではないだろうか。

会津

磐梯山

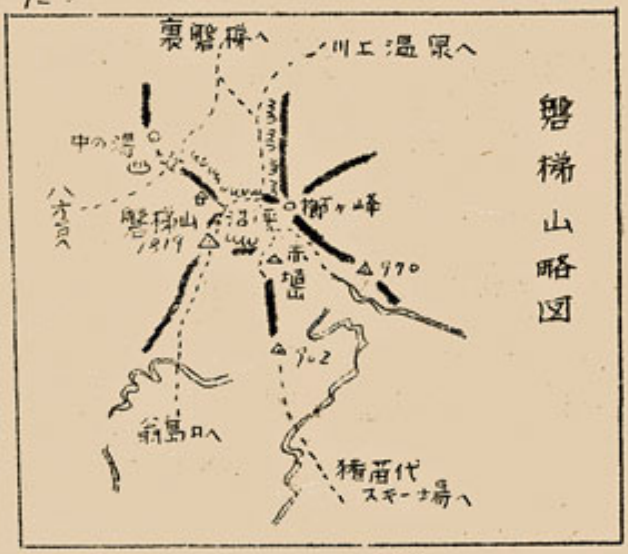
一田口豊一

7月14・15日総勢7名で磐梯山を登って来ました。いつも、列車の中から素通りしてしまう山であったが、今回は、やっと念願叶って登山できました。我々、中年山岳会（私は除く）は、毎年、寄集って泊りがけで山行を行っています，が、いつも雨にたたられ、どうしでした。しかし、今年は例年と比べて、嘘のような快晴でした。？

猪苗代駅へ着いた時も、我々一行を歓迎するかのように、磐梯山が、くっきりと顔を出していました。『明日もこのようだといいな』と思いながらバスに乗り、一同五色沼へと向かって行きました。五色沼へは一度来た事があるので見学もほどほどに、磐梯山へと足を向けました。

今日の宿泊先は、中ノ湯温泉。ちょうど、新ハイの本にも載っていましたので、期待しながら登って行きました。磐梯高原から2時間位登ったでしょうか。硫黄の臭いがプーンと鼻についてきました。上を見上げると見えてきました。中の湯温泉小屋が。

時間は14時半頃でしたでしょうか。Sさんは、時間もまだ早かったので、磐梯山の頂上へ行きたかったらしいのですが、何しろ中年山岳会（年令構成60代1人、50代4人、40代1人、30代1人）の弱さか、今日はここまでという事で、とりやめになりました。翌朝2時半起床で御来光を見に行く予定でしたが、宿屋のお婆さんに聞いたら、明日は駄目という事で中止になりました。



磐梯山略図

朝、5時半起床、ゆべ夕誰かの鼾で熟睡出来ず、7時出発。昨日とうってかわって曇り空、一行は天気を気にしながらも磐梯山頂上へ到着。頂上からの眺めは、ガスが

かかって悪天候。やはり、Sさんの言うとおり、昨日のうちに登っておくべきだったかと悔まれる。

頂上を後に、一路、猪苗代スキー場へと歩く。途中、弘法清水、黄金清水なる冷たくておいしい水場があったが、これなど、持ち帰って水割りにすれば、最高だと思った。

段々と下って行くに従って、雲ゆきが怪しくなり、ぽつぽつと雨が落ちてきた。猪苗代スキー場近くあたりから本降りになってきた。皆で、わいわい、がやがや言いながら、やはり雨男のSさんがいるからだと、冗談言って麓へ降りてきた。麓へは、バスが通っていないとの事なので、タクシーを呼んで、猪苗代駅へ向かった。

猪苗代駅へ到着して磐梯山を眺めたら、何事もなかったように、くっきりと我々の目の前に姿を現わしていた。

何故、我々の山行の時はいつも雨に逢うのだろう。森吉山、夏油、白布高湯……ＥｔＣ、たんなる巡り合わせなんだろうか。

◇　◇　◇

◇キャンプ◇

石川信子

今年の夏休みキャンプは、8月7日のジョギングトレーニングに始まる。子供達の夏休み行事の丹沢キャンプも今年で3回目になる。

日頃、週1回、1時間半の婦人体操教室以外、運動をやっていない私にとっては、年に1、2度程度のハイキングでは、重たい荷物を背負って炎天下を歩く自信など、とてもない。そこで出発前の5日間、20分のジョギングをやったのである。それでも効果はあったようで、無事、1泊2日のキャンプは、昨日（8月13日）終った。

ジョギングコースについて、少し書いてみると、長津田に残された唯一の森林地、今でもカブト虫クワガタが子供達を喜ばせ、4時過ぎには、アブラゼミ、ヒグラシが

鳴き競い、時にはホトトギスも鳴くというゴールデンコースである。やがては、このコースも宅地化してしまうということだが、トレーニングに終らず、続けてみたいと思っている。

キャンプ地まで、車で行かれる本谷出合キャンプ場まで、我々は毎年歩いていく。1回目は、3才娘が歩かなくて、荷物の上に乗り、お父さんが大変な思いをした。2回目は、お兄さんがとばして、又置いてきぼりをくった。3回目の今年は、何んとかがんばれた。

。曇り勝ちの天候が幸した、川は浅いが冷たくてきれい。夜は花火で終る。地面が平らでゴッゴツもなく、最高のテント内も子供には不満足、こんな狭い所暑くて寝られない。チビさんの足が、どーんときてびっくりもする。満月と満天の星、久しぶりだ。

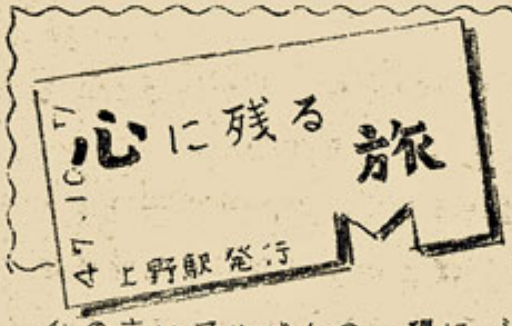
翌日は9才10才の男の子は沢へ行く。娘と私は川遊びでお留守番。テントを撤収したらポッポッ降ってきて、時々集中豪雨のように、強く降る中、大急ぎでバス停へ。

「今年のキャンプどうだった?」「おもしろかったよ」「何がおもしろかった?」「沢が。」後で2人のこんな会話を聞いてしまった。「お兄ちゃん沢こわくなかった?」「こわかったよお」「そうだよね、ぼくもこわかったよ。お父さんたら、ぼく足が短かくてそんなに早く行かれないのに、どんどん引っぱるんだもん。」「あの雨こわかったなあ。」とは娘の言。

(29頁からつづき)失火して全焼し、家財道具と共に、それ迄の収集品も一切が灰になり、親子5人、雨露をしのぐ所もない乞食同然となってしまった。当然、趣味の方もすっかり諦らめ、家の再建のためたゞがむしゃらに仂く数年が続いた。それでも、火災後、友人に頂いたり、自分で入手したりして、乗車券や、煙草の空箱なども少しづつ集まってきた。停年になって、足も衰えて、山歩きが出来なくなったら、又引張り出して楽しみたいと思う。

山へ行った途次、駅のスタンプを押したり、泊った宿のマッチや箱袋等を、アルバムの片すみに貼っておくと、写真だけよりは、おもしろいものである。(熊谷)

◇　◇　◇



板室のドライブインでのこと

熊谷松治

私の古いアルバムの一隅に、"板室郵便局郵政事務官、室井勘一。という名刺が大事に貼ってある。

今から12年前の秋、職場のグループ旅行で、那須方面の周遊へ出たときのことである。前日は朝、上野を立ち、黒磯からバスで桑臼岳山麓へ行き、ロープウエーで山頂まで登り、折からの快晴で、周囲の山のどうたんつつじなどの紅葉や、山頂からの大展望を満喫して、その夜は、板室温泉の国民宿舎、幾世荘に一泊した。

翌日も好天で、午前の時間を利用して、バスで20分程の"乙女の滝"を見て昼食をし、黒磯へ出て帰途につく予定になっていた。

所が、幹事の私のウッカリで、指定券を買ってある帰りの列車に間に合うようなバスがないのである。仕方なしに、歩いて途中のドライブインまで戻り、タクシーを呼ぶことにした。しかし、電話しても、車が出払っていて、いつになるかわからないという。

バス折返し点の板室温泉までは歩程30分位であるが、幹事として歩いてくれとも云われず困っていると、電話のやりとりを聞いていた店の奥さんが、主人が休みで家にいるから、車で送るよう頼んでみるとのこと。そのご主人は、快よく11名の我々一行を、2度も往復して運んで下さった。

私達は、何度もお礼を云って、少しばかりの志を差し出したが、お礼など頂くつもりで送ったのではないからと、どうしても受取ってもらえない。そして、「又、那須へおでかけ下さい」とも云われた。それで、しぶるご主人からやっと頂いたのが冒頭に紹介した名刺である。

この旅行は、紅葉や展望、宿舎での宴会など、それぞれ楽しかったが、それにも増して、このご夫妻のご好意は、終生心に残るものとなった。このドライブインは、現在温泉旅館として営業している、料金は民宿並み、料理は豊富、露天風呂もある。

黒磯市板室668 板室山荘 02876-9 0405(代)

編集後記

◆ 本年2月の会報で、「しだ」発行のお知らせをしてから、8ヶ月目で、やっと皆さんのお手元にお届けできる運びとなりました。今号は、特に支部会報第300号達成記念号として企画したので、会の歴史のようなものもと思ったのですが、会創立当時の方は殆んど退会されて、連絡も困難なため、原稿は在籍会員のみに限定しました。

◆ 原稿募集発表後すぐ書いて下さった方もいましたが、7月に入っても集まりが悪く、一時はどうなるかと心配しました。一部の方には、大変失礼な電報のような催促のハガキを差し上げたりして、おかげ様で、何とか前号なみの執筆者となりました。素人の仕事ですから、製版、印刷とも意に添わないことと思います。特に本号は思い切って横書きにしました。これは、全く私の書きやすいという理由だけです。皆さんが縦書きが良いと云われれば、次回は又、縦書きにします。

◆ 会報300号ということで、会報のことに少しふれますと、例会のお知らせらんに毎月下手なカットを入れていますが、これがなかなか季節感のある適当なものがなく困っています。新聞のカット等から拝借してお茶を濁していますが、がり版向きのカットを書いて下さる方がおりましたらご協力をお願いします。又、新聞などに良いカットがありましたら提供して下さい。又、「しだ」について、会報について何なりと、ご意見を寄せて頂きたく、それが作る者にとって何よりの励みとなります。

◆ 最後になりましたが、去る9月2日は、会報300号達成記念バーベキューの会を企画され、その席で、思いもよらぬ立派な感謝状と記念品を頂き、ただただ当惑するばかりでした。北村代表始め、各委員、準備の殆んどを整えて下さった星野ご夫妻、ケーキを提供された田口さん、ご参加下さった会員の皆さんに心から御礼申し上げます。　59・9・16（熊谷）